

アルバータだより

Hokkaido-Alberta Dairy Science & Technique Exchange Association



酪農技術の向上と交流のさらなる発展を目指して

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会

会長 平尾和義

(学校法人 酪農学園理事長)

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会会員ならびに関係者皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

本協会の事業推進につきましては、日頃から皆様の格別のご支援とご協力を賜り衷心より厚くお礼申し上げます。

この冬は、各地で多くの方々が記録的大雪の被害に遭われました。昨年の自然災害発生に続き、農業への影響が懸念されます。被害に遭われました方々に、心よりお見舞い申し上げます。

昨年11月に第12回全日本ホルスタイン共進会(全共)が栃木壬生町において開催されました。わが国乳牛の能力はインタープル参加によって、世界のトップクラスにあることが証明されており、この度の全共では、そのことがあらためて認識されたと思います。なかでも、北海道の酪農家が出品した未經産牛、経産牛はともに最高位の栄冠を獲得し、その技術の高さを全国に示したものといたします。関係者皆様の日頃からのご努力に敬意を表し、心よりお祝い申し上げます。会場では、後継者問題の解決、後代検定事業推進や牛乳消費拡大に関するアピールがみられ、現在の厳しい酪農諸事情も反映されましたが、北海道酪農家皆さんの活躍は、酪農を目指す若い世代の心を刺激し、さらなる酪農への夢を掻きたて一層熱くしたものと考えます。

このようななか本協会は2005年度も、会員をはじめ関係者皆様方のご協力をいただきながら、留学生の派遣、海外農業技術セミナー開催など、計画していました諸活動を以下のとおり実施してまいりました。

2005年度派遣留学生は、酪農学園大学酪農学科3年生の女子学生1名を2005年4月より1年間の予定で派遣し、4月11日より4週間、カルガリーの語学学校で英語を勉強し、5月11日より約4カ月間の酪農実習を行いました。その後、9月よりオールズカレッジで授業を履修し、2006年3月末に帰国する予定です。留学中は定期的に報告書が提出され、酪農実習、オールズカレッジのいずれにおいても充実した留学生生活を過ごすことができました。

2006年度の派遣留学生については、選考試験を2005年11月に実施し、社会人1名、酪農学園大学食品科学科4年生1名、酪農学科3年生2名を選考しました。また、年々多様化する留学希望者のニーズに応えるため、2006年度より酪農研修派遣留学プログラムに2つのコースを設置しました。ひとつは、従来どおり4カ月間の酪農実習を伴う「フ

ームステイコース」、もうひとつは酪農実習に代えてアルバータ大学の英語研修プログラムを4カ月間受講する「英語コース」です。今年度は4名のうち3名がファームステイコース、1名が英語コースに参加します。これら4名の派遣留学生は、協会主催の5日間の英語研修と危機管理など派遣前研修を受講した後、3月6日の出発式を経て、ファームステイコースは2006年4月8日に、英語コースは5月1日にカナダに出発する予定です。

本協会は、主幹事業のひとつである海外農業技術導入普及事業を2001年より行っております。今年度は2名の講師を招いて、2006年2月15日に札幌市教育文化会館において第5回海外農業技術セミナーを開催しました。特別講演として韓国韓京大学校動物生命資源学科 張敬萬副教授に「韓国酪農の現状と将来」と題し、韓国酪農の概要、現状、展望およびWTOとFTA対応について紹介いただきました。韓国酪農の発展経緯は日本酪農と共通するところも多く、現在わが国が抱えている生産調整、環境対策は韓国でも重要課題になっていることが紹介され、クォーター制の導入など日本では馴染みの薄い制度のあることが詳細に解説されました。また、京都大学大学院農学研究所久米新一教授による「高泌乳牛の栄養管理の実践」について、経営の根幹に関わる最も重要な技術課題を現在抱える多くの問題を背景に、その基礎から応用までの最新理論を分かりやすく紹介解説いただきました。牛乳生産調整の時代を迎え、酪農を取り巻く情勢の厳しさに変わりはありませんが、食の安全、安心が求められる今日にあっては、時代に即応した新しい生産体系の構築が重要であると思われま

す。毎年のごことでありますが、年度末の多忙な時期にもかかわらず、農業関係団体、酪農家、大学等から多数の受講者が参加し、盛会裡に終えることができました。来年度も生産現場のご要望に応えるべく、セミナー開催に向け準備を進めているところで

す。本協会は、これまで受け継がれてきた技術と知恵に新しい科学技術の融合を図り、次世代に継ぐ酪農技術の創造を目指し、微力ながらその一翼を担うべく、事業の推進に努めてまいりたいと考えています。今後とも皆様のご指導とご鞭撻を一層賜りますようお願い申し上げます。



農業の国際交流事業の活性化に期待して

財団法人 酪農学園後援会
常務理事 井上 詳介

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会は発足以来すでに33年を経過し、これまで教育研究者、酪農青年や学生の交流実績は260名におよび、また海外農業技術導入普及事業で毎年のようにカナダの専門家を招聘するなど、北海道酪農への貢献を目的に活動が続けられ、酪農発展に大きく寄与されています。本協会の設立にご尽力された当時の堂垣内知事、佐藤貢理事長そして運営に尽力された歴代の本協会々長及び関係の皆様のご功績に敬意と感謝を表します。

近年、農業の国際交流事業は停滞または低迷の様相が見られます。本協会においても当初の10名を超える派遣、カナダからの受け入れも5名前後で交流がありましたが、この十数年は1～2名が実態です。他の団体も同様の傾向だと認識しています。確かにそれぞれの努力によって、技術的には諸外国に追いつき追い越す勢いで先進国に並んで来ており、目を見張るものがあります。しかし、農業政策、農地制度、トータルで見た農業経営技術や他産業との閉鎖的環境等々は先進国のそれらとは大きな格差が存在したままで、各地には競争力のある農業経営も点在するようになりましたが、総じて農産物の価格競争力は弱いままであります。外から見ると農業は大変魅力のないものになって、高齢化していく農業者に替わってくる新規参入が極めて少なく、耕地面積も今では420～430万haと最大時から100万ha以上が転用地、荒廃地となり、更に今の農地の放棄面積が21.7万haと東京都の面積に匹敵するまでになっています。現WTOではわが国の農産物を守るために重要品目の関税率は、例えばこんにゃく芋1,705%、エンドウ豆1,083%、コメ778%、落花生593%、バター482%、砂糖325%、大麦256%、小麦252%、でんぶん234%、牛肉50%と交渉の結果として認められています。

この次のWTO新ラウンド（ドーハ・ラウンド）については、05年12月18日香港の閣僚会議で合意に達することが出来ず、途上国の開発支援や先進国の農業保護の削減を盛り込んだ閣僚宣言を採択して、決裂をひとまず回避し、そこで具体策を決める期限を06年4月末に伸ばしました。残された時間は後3ヶ月しかありませんが、決着のヤマ場に向けて日本は国内の農政改革や市場開放で責任ある回答を出さなければなりません。農産物交渉の焦点は ①輸入する農産物の関税率に上限を設ける「上限関税」の導入 ②例外扱いを許される重要品目の確

保 ③輸出補助金の撤廃の三つとしていますが、この三つとて前者は原則75～100%、次は日本の農産物の交渉対象品目約1,300の1%と限るなど厳しい主張が王道で、わが国にとって農業分野に関しては不利な状況が好転する気配はありません。

交渉の結果がこの通りにはならないにしても、各国が相当の譲歩をしない限り決着は難しい。決裂にでもなれば貿易立国であるわが国は成り立たなくなるのは必携でしょう。それでは二国間或いは複数国間でのFTA（自由貿易協定）で進めればよいと思われませんが、この交渉も農産物の壁が厚く大同小異の流れでなかなか進展せず、日本は遙かに遅れているのが実態で孤立観すら拭えません。

わが国は世界最大の食料輸入大国です。その量はわが国耕地面積の3倍の1,200万haに及ぶ外国の土地を使って農産物を確保していることとなります。このことはまた同時に大量の淡水を輸入していることとなります（コメ1t生産するのに6t、小麦1tでは3t、牛肉1tでは20tの水が必要）。世界の人々が使える水は地球全体の0.01%に過ぎず加速度的に水は不足しており、更に毎年一つの県の面積に匹敵する土地で砂漠化が進んでいます。従って、技術革新にも係わらずここ数年穀物生産量はほぼ横這いです。世界人口は毎年1億人近い数値で増加している状況、更にBRICsの急速な経済発展に伴う産業資源、食料資源の大量需要の台頭等々により、自然破壊の進行と環境汚染の広がりに対する問題と平行して世界の食糧と水の確保が深刻な喫緊の課題として横たわっています。

このような情勢と取り巻く環境から見て、食料不足は突然に襲って来ます。農業経営者及び食料に携わる関係者は他産業以上に世界各国との技術や学術交流を盛んにしてお互いが理解し合い、環境保全と食料自給率の向上に取り組まなければ、諸外国の理解は得られないと思います。

これらの一環として、本交流協회가仕切り直しをして、これまで以上に盛んな交流事業に発展することを願って止みません。（財）酪農学園後援会と致しましても、全国の会員の意を対して公益教育事業の中に国際交流事業は大きな柱に位置づけられておりますので、積極的な支援をさせて頂きたいと思っております。

目

酪農技術の向上と交流のさらなる発展を目指して … 1
農業の国際交流事業の活性化に期待して …… 2
第33回定期総会と派遣留学生報告会の開催 …… 3
海外農業技術セミナー …… 4～5
第33回（2006年度）派遣留学生 …… 6～7

次

留学生派遣に関する危機管理について …… 7
Expectations for Overseas Training …… 8
第32回（2005年度）派遣留学生からのたより …… 9
アルバータ酪農科学技術交流協会 交流実績一覧…10
会費・寄付金 …… 10

第33回定期総会と派遣留学生報告会の開催

2005年6月28日、酪農学園本館にて北海道アルバータ酪農科学技術交流協会の第33回定期総会（2005年度）を開催し、関係者28名の方々にご出席いただきました。

定期総会は平尾会長があいさつを述べ、次いで北海道農政部農政課主幹の小野塚修一氏から来賓のごあいさつをいただき、議事に移りました。

議事においては、第一号議案 2004（平成16）年度 事業実績報告ならびに収支決算報告、第二号議案 2005（平成17）年度 事業計画ならびに収支予算、第三号議案 役員

の補選・選任がそれぞれ承認されました。

定期総会終了後には、派遣留学生報告会に移り、2004年度（第31回）留学生の池本麻由子さんがカナダ・アルバータ州ロチェスター（Rochester / Unique Stock Farm）での酪農実習体験やオールズカレッジでの留学体験を、映像を交えて報告しました。（池本さんの研修報告は、2005年7月発行の酪農研修派遣留学報告書に掲載しています）

新役員は下記のとおりです。

《役員一覧》

役職	氏名	所属・役職等	役職	氏名	所属・役職等	
名誉会長	高橋はるみ	北海道 知事	参 与	土井 時久	雪印乳業株式会社 酪農総合研究所 所長	
顧問	佐藤 隆	北海道 農政部長		小川 澄男	雪印乳業株式会社 常務取締役	
	矢野 征男	ホクレン農業協同組合連合会 代表理事 会長		井上 詳介	酪農学園後援会 常務理事	
	会長	平尾 和義		学校法人酪農学園 理事長	岡本 全弘	酪農学園大学酪農学部 学部長
副会長	金川 幹司	北海道酪農協会 会長		谷山 弘行	酪農学園大学獣医学部 学部長	
	町村 末吉	酪農学園後援会 会長		中原 准一	酪農学園大学環境システム学部 学部長	
常任理事	松中 照夫	酪農学園大学エクステンションセンター 所長		小阪 進一	酪農学園大学酪農学部酪農学科 学科長	
	黒澤力太郎	学校法人酪農学園 学園長		村岡 範男	酪農学園大学酪農学部農業経済学科 学科長	
	高橋 節郎	学校法人酪農学園 副理事長		菊地 政則	酪農学園大学酪農学部食品科学科 学科長	
	渡邊 誠治	学校法人酪農学園 常務理事		鈴木 忠敏	酪農学園大学酪農学部食品流通学科 学科長	
	大谷 俊昭	酪農学園大学 学長		篠崎 志朗	酪農学園大学環境システム学部環境マネジメント学科 学科長	
	安宅 一夫	酪農学園大学 教授		岩井 洋	酪農学園大学環境システム学部地域環境学科 学科長	
	武田 善行	北海道国際農業交流協会 会長		矢吹 哲夫	酪農学園大学環境システム学部生命環境学科 学科長	
	城座 勝明	雪印種苗株式会社 代表取締役社長		菊田 治典	酪農学園大学短期大学部酪農学科 学科長	
	北 良治	北海道ホルスタイン農業協同組合 代表理事 組合長		石田 貞夫	酪農学園大学校友会 会長	
	大山 裕	日本酪農青年研究連盟 委員長		井上 錦次	酪農学園大学短期大学校友会 会長	
	菅沼 英二	酪農学園大学 名誉教授		高倉 勝孝	学校法人酪農学園 監事	
	監事	佐藤 巖		社会福祉法人北海道いのちの電話 理事長	佐々木正一	酪農業（北海道標津町） 酪農業
		田子根良博		雪印種苗株式会社 経理部財務課長	松本 勇	酪農業（北海道標津町） 酪農業
					事務局長 堂地 修	酪農学園大学酪農学部酪農学科 教授



海外農業技術セミナー

海外農業技術セミナーは、道内の酪農家や酪農関係者に海外の酪農情勢や酪農技術に触れてもらい、酪農経営の安定・発展に役立ててもらおうと毎年開催しています。5回目となる今回は2006年2月15日に札幌市教育文化会館で開催し、酪農家や関係者など約60名が参加されました。

今回は、京都大学大学院農学研究科の久米新一教授に「高泌乳牛の栄養管理の実際」をテーマとして講演していただきました。さらに、酪農学園大学と学術交流協定を締結している韓国・国立韓京大学校動物生命資源学科の張敬萬副教授を招聘し「韓国酪農の現状と将来」と題して特別講演を行っていただきました。

久米教授は、世界的傾向として個体乳量と経営規模が急速に拡大しているが「高泌乳牛が増えるに伴って受胎率が低下している。そのため、能力向上と規模拡大に適応した栄養管理が求められている」と指摘されました。その上で「ただ単に乳量が増えたから受胎率が低下しているわけではない。受胎率低下の要因としては、①育種的要因②栄養的要因③管理的要因④動物的要因⑤飼料的要因－などが複雑に絡み合っている」と述べ、繁殖成績の改善に向けて栄養的側面からアプローチされていました。

特に「移行期（分娩前後3週間）が栄養管理の最も難しい時期。移行期の栄養管理が不十分だと代謝障害が増加し、乳生産や繁殖成績の低下を招く」とした上で「分娩後の乾物摂取量を早期に高めて、エネルギーや栄養素の充足を早めるための精密な栄養管理が大切である。特に①分娩前に濃厚飼料の給与比率を3割程度②分娩前から分娩後と同じ粗飼料構成－にすることが分娩後の乾物摂取量の早期増加につながり、乳量増加や代謝障害の予

防、繁殖成績の改善に結び付く」と語られました。

また、張副教授による特別講演では「酪農経営の収益性は内部条件と外部条件によって決まる。韓国では生乳価格引き上げを機に市乳消費が減少、周期的な需給アンバランスが発生しており、現在は30万～35万tの生産過剰にある。他方、外部条件では世界貿易機関（WTO）や自由貿易協定（FTA）などの農業交渉が挙げられるが、国際舞台での韓国政府の農業政策の不備に多くの酪農家が不満と不公平感を持っている」と述べられるとともに「深刻な生乳需給アンバランスは一時的ではなく、構造的な問題としてとらえる動きがある。同様な食文化を持つ日本の市乳消費形態に注目してみる必要があるだろう」と強調されました。また「今後、牛乳消費は高級乳製品を中心に拡大すると思われるが、乳製品の輸入増大も予測される。その結果、韓国酪農は市乳生産に限る可能性が極めて高い。国産生乳を利用した乳製品の開発、所得安定を図る酪農政策などの推進が求められている」と当面する課題について指摘されました。

両講演終了後も、個別に質問をするなど熱心な参加者らの姿が見られ、盛会にセミナーを終了いたしました。



閉会のあいさつを述べる町村副会長



久米新一氏

1954年 東京都生まれ
 1977年 京都大学農学部畜産学
 科 卒業
 同年 農水省九州農業試験場
 畜産部家畜第3研究室
 研究員

1990年 農水省畜産試験場
 栄養部飼料資源開発研究室 主任研究官
 1997年 農水省北海道農業試験場
 畜産部家畜管理研究室 室長
 2004年 京都大学大学院農学研究科 教授

農水省在職時には、乳牛の栄養生理に関する研究に従事
 1985年 日本畜産学会 研究奨励賞 受賞
 1995年 日本畜産学会賞 受賞



張敬萬氏

1961年 韓国 京畿道生まれ
 1993年 東京農業大学農学部畜
 産学科 卒業
 1995年 東京農業大学大学院
 農業経済学専攻修士課
 程 修了

1998年 東京農業大学大学院
 農業経済学専攻博士課程 修了
 1999年 韓国 国立韓京大校 農業生命科学大学
 動物生命資源学科 専任講師
 2000年 韓国 国立韓京大校 農業生命科学大学
 動物生命資源学科 助教授
 2005年 韓国 国立韓京大校 農業生命科学大学
 動物生命資源学科 副教授
 2005年 韓国 国立韓京大校
 酪農技術支援センター 所長

※これまでの海外農業技術セミナー

年度	講演テーマ	講師	参加者数	テキスト在庫
2001	乳質、乳房炎と搾乳管理	ピエール・レベスク氏 ボカティエール農業技術大学 (カナダ・ケベック州)	130	×
2002	乳牛の栄養管理と疾病予防	デビッド・ハミルトン氏 モードン動物病院 (カナダ・マニトバ州)	89	×
2003	肢蹄の構造と歩行との関係を知る 乳牛の繁殖能力における重要な要素を知る	ゴードン・アトキンス氏 アトキンス獣医診療所 (カナダ・アルバータ州)	127	×
2004	高泌乳牛における受胎性と繁殖管理	ルーベン・メイプルフト氏 サスカチュワン大学獣医学部 (カナダ・サスカチュワン州)	141	○
2005	高泌乳牛の栄養管理の実際 韓国酪農の現状と将来	久米新一氏 京都大学大学院 張敬萬氏 韓国 国立韓京大校	58	○

◆ 2004年度、2005年度に開催されたセミナーのテキストを無料で送付いたします。

ご希望の方は、希望テーマ、氏名、住所、電話番号を明記の上、ファックス (011-387-2805) かE-mail (exc-alt@rakuno.ac.jp) にて申し込みください。(数に限りがございますので、先着順で在庫が無くなり次第終了とさせていただきます。)



第33回（2006年度）派遣留学生

第33回派遣留学生は、2005年11月12日（土）に適性検査、一般教養、英語、作文、面接試験を行い総合的に判断し下記の4名を選考しました。

なお、今回の派遣より留学希望者のニーズを考慮し、従来のファームステイ研修+オールズカレッジ留学のファームステイコースに、英語研修（アルバータ大学）+オールズカレッジ留学の英語コースを加え、2つのコースで派遣いたします。

くろ だ とも こ
黒田 知子（ファームステイコース）

東京農業大学 地域環境科学部 生産環境工学科卒業（26歳）



～出発に向けての抱負～

出発に向けて私が一番に思うことは、両親への深い感謝です。この留学にはかなりの費用がかかることは事実です。



大学を卒業し、働き始めて4年が経とうとしています。両親からの支援がなければ私の希望は当分叶わなかったと思います。また、周囲で応援してくれる人達からも大きな力をもらいました。でも、最後に何を掴むかは、自分の力しだいだと思います。カナダでの生活に慣れるまでには相当の努力が必要だろうと覚悟しています。そしてそれを乗り越えた時には、大きな収穫があるだろうと期待しています。

いがらし ひろ ゆき
五十嵐 博之（ファームステイコース）

酪農学園大学 酪農学部 酪農学科 3年次修了（21歳）



～出発に向けての抱負～

カナダに行くことに対して不安はあります。語学力が全くないので、話すことはもちろん聞き取ることすら出来ません。



しかし、根拠はないのですが、私は言葉の壁なんてないと思います。たくさんの人々と知り合いになって、語学はもちろん、いろいろなことを学んできたいと思っています。カナダに行って、悩むことも弱音を吐くこともあると思いますが、焦らずひとつずつ克服して、大きな人間になって日本に帰って来たいと思います。カナダでの生活が、私にとって大きな財産になるよう頑張ってきます。

よし だ えみ こ
吉田 恵美子（ファームステイコース）

酪農学園大学 酪農学部 酪農学科 3年次修了（21歳）



～出発に向けての抱負～

11月中旬にカナダへの留学が決定してから、早くも2ヶ月が過ぎました。残すところあと2ヶ月。カナダへの出発準備も着々と進む中で、カナダ留学への実感が湧きつつあります。



カナダへの留学は私にとって大きな冒険です。右も左もわからない環境の中に足を踏み入れるのですから、不安がないと言ったら嘘になります。しかしそれ以上に、苦勞しながらも心身共に強くなりたいという気持ちが強くあります。そんな思いを胸に、自分のペースを守りつつ、カナダでの生活を楽しくできたいと思います。

なり た より
成 田 慈 (英語コース)

酪農学園大学 酪農学部 食品科学科 卒業 (22歳)

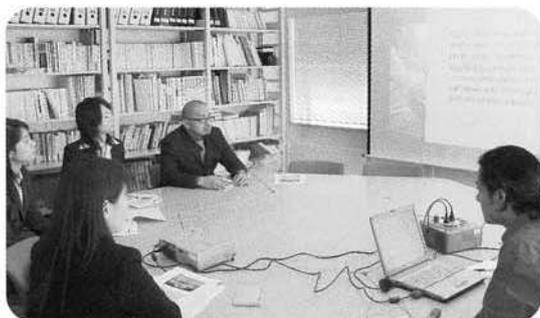


～出発に向けての抱負～

3ヵ月後に自分がカナダで生活することを考えると、不安な気持ちと早く行きたいという気持ちが同時に込み上げてくる。大まかに言えば、不安な気持ちとは、きちんと英語をマスターできるかということ。楽しみな気持ちは、新しい環境で様々なことに挑戦することである。しかし、この2つをやり遂げ、充実した留学生活にするのは、私自身のやる気と努力次第である。このことを踏まえて、カナダでは、自分から学びにいくという強気な姿勢で、常に自分にプレッシャーをかけていこうと思っている。



2006年度派遣留学生の4名に対しては2月27日から5日間の日程で基礎的な英語研修を行いました。3月6日(月)には、研究生としてオールズカレッジから酪農学園大学に留学中のアンジェロ・フェルカーノ君(メキシコ国籍)から、オールズカレッジの概要や自身の留学体験談などのプレゼンテーションがあり、を受け、同日午後の出発式では、平尾会長があいさつの後、奨学金を授与し、派遣留学生それぞれが留学への抱負等を語りました。



留学生派遣に関する危機管理について

近年、海外研修・海外留学等の形で海外で学ぶ日本人の数が激増していますが、一方、研修・留学期間中に事故・病気・事件等の不測の事態に遭遇するケースも増加の一途をたどっています。

海外研修・留学を実施している機関にとって、プログラム中の安全管理対策は重大な関心事であるにもかかわらず、多くの場合、保険会社、旅行会社まかせになっているのが現状です。

当協会では、危機対応のための綿密なオリエンテーションを大切にすることはもとより、万が一、緊急事故が発生してしまった場合の的確かつ迅速な対応をすべく、2005年度より海外留学生安全対策協議会(JCSOS)に正規会員登録し、派遣留学生に対する「海外緊急事故支援システム」に加入しております。

「海外緊急事故支援システム」とは、万が一、事件・事故等に巻き込まれるなどの緊急事態が発生した場合、海外危機管理の経験とノウハウの豊富なリスクマネジメント会社「日本アイラック㈱」が事故対策等を担当し、迅速的確な事故対応サポート、経費負担面でのバックアップ等の支援が行われます。

主 な 対 応

- ・24時間情報収集
- ・事故対策本部の設置
- ・死傷病者の救援
- ・家族対応
- ・マスコミ対応
- ・関係省庁への報告
- ・保険会社や海外アシスタント会社との折衝など80数項目にわたり支援

~Special Essay~ 現在、酪農学園大学に研究生として留学中のアンジェロ・フェルカーノ氏のエッセイです。

Angel Fercano : メキシコ出身。2003年よりカナダ・オールズカレッジに在籍。農業ビジネス・プログラムの一環として日本で研修することを希望し、2005年11月に来日。日本語学校に2カ月間通った後、現在は恵庭市の福屋牧場にて酪農研修中。



Angel Fercano

Expectations for Overseas Training



Alfalfa cutting (harvesting)

While there are positive aspects about being in a new place of employment, there are also big challenges: work environment, people's culture, communication etc.

To effectively understand and manage problems related to farms and agribusiness industry, an academic learning is important to approach these problems. Moreover, students must obtain an experiential learning through an employment where they can execute task and be part of problems that are really related to farmers. Participating in a "Exchange Program", students have a chance to experience different cultures, farming and/or business techniques that are practiced abroad. This can be consummated by not only hosting a students-trainee but also from the contact with other students-trainees in the program. It is necessary to ensure that the scope of work includes new tasks or activities to make the placement a learning experience. This "Exchange Program between Olds College and Rakuno Gakuen University" will help me to develop an understanding of lifestyles and cultural patterns in Japan, as well as improve my Japanese skills. It will also help me strengthen and improve mutual understanding between the persons involved.

The fact, of choosing Rakuno Gakuen University is that, it provides students with an opportunity to study agricultural and dairy farming practices.

It is understandable that the main goal to achieve prior and through my training placement in Japan, would be language improvement and culture understanding. To better understand my motives of choosing Rakuno Gakuen University in Japan. I have selected three goals with well-defined aims and objectives. The last two goals are built upon competencies gained in the academic portion of my program (BSc. Agribusiness).

A. GOAL: I will be able to learn basic Japanese language and culture.

1. Aim: I will be able to communicate in basic Japanese language.
I will be able to get involved with Japanese culture on a daily basis.
2. Aim: I will be able to determine the challenges in learning Japanese.
Objectives: I will be able to research easier ways of learning Japanese and to compare the differences between Japanese grammar and English.
3. Aim: I will be able to implement an appropriate basic Japanese learning program for students who share same interests as myself.
Objectives: I will be able to identify the importance of learning Japanese and to identify an efficient way to achieve the learning.



Farming entrance

This will be achievable through; Taking Japanese classes prior to the work placement. Getting involved with student communities or school activities that are favorable for improving my communication skills. Assisting to any cultural or social events that may be helpful to understand better Japanese cultures.(Theater, music, food etc..). Visiting business and trade shows related to the agriculture industry.

B. GOAL: I will develop project management skills.

- Aim: I will develop task-scheduling skills
- Objectives: I will identify task to be performed with priority within the business.
I will identify what procedures are needed in order to perform the task effectively.
I will identify how the procedure is to be obtained.
I will determine when the task needs to be executed.



Holsteins black and white show Hokkaido

C. GOAL: I will develop communication skills

- Aim: I will keep the Olds College community and Rakuno Gakuen University's International department informed about my activities performance.

Spending time abroad to gain overseas experience is a great benefit to students, because it is being recognized by businesses related to the industry, governmental institutions, School staff and most importantly, students. For the students on the exchange program at Rakuno Gakuen University, farm placement is an optional part of the program this year.

However, I'm taking an optional year out from my studies, pre-final year, to gain overseas experience. Currently, I'm a candidate to BSc, Agribusiness, 3rd year, at Olds College, AB, Canada. To carry out my experiential learning, I have been placed at Emlane Dairy Farm (Fukuya Bokujou), which produces and sells dairy products through cooperatives and direct sale to customers. Today, Fukuya Bokujou is Japan's top dairy farm.

With this work placement I will gain self-confidence through skills improvement, in areas such as dairy cow management, agriculture production and management, marketing and customer service, within the Japanese culture.

Finally, I chose Japan for the following reason: to have an overseas experience and proficiency in a foreign language, to be able to operate in a global market, to gain experience and relationships with farming related industry, and understand what is happening outside of Mexico and Canada. But most importantly, to learn and understand farming practices from the Japanese perspective. It really matters to me, as I looked forward to running my own farm-agribusiness, as well as to contribute positively to my community farming development.

第32回（2005年度）派遣留学生からのたより



語学学校のアクティビティーでバンフに行った

カナダに来て9ヶ月が経ちました。

私は4月にカナダに来て、1ヶ月語学学校に通いました。語学学校では多くの留学生と素敵なハウスメイトに出会えました。バンフに行ったり、アパートでパーティーをしたり、韓国人や日本人といることの多い日々でしたが、日本にいたときよりは英語を使う機会はかなりありました。でもホストファミリーとは会話を持ってない自分にうんざりしていました。5月に入っても、英語はやはり私の中で大きな問題であることに変わりはありませんでした。カルガリーからオールズに来て、オードリーはゆっくりと話してくれたし、ファームセイフティーの先生はすごく優しく、一人で知らない土地にいてもあまり不安はありませんでした。ファームセイフティーを終え、実習に入り、毎朝6時半から掃除や搾乳、給餌を手伝いました。ホストファミリーは、2年前に先輩がお世話になったところです。乳牛の頭数は、大学2年生のときにお世話になった委託実習先の農家さんとあまり変わらない、60頭程度。毎日の仕事もそれほど大変ではなかったし、ホストマザーがよく喋る方で、



友達が私の誕生日を祝ってくれた

宮川 沙織

酪農学園大学 酪農学部 酪農学科3年



ワールドカルチャークラブでのポットラックパーティー
いろんな国の料理がいっぱい

毎日の農家生活もひどく退屈はしませんでした。そのうえ彼らは、私をいろいろなところへ連れて行ってくれました。彼らの友達牧場で新しいパーラーを見たり、違った給餌方法を教わったり。いろいろ知ることができたのは勉強になりましたし、何より、農業生活の中でのお出掛けはいい気分転換になりました。一緒に暮らしたり働いたりする中で、英語が使えず困ったこともありました。こちらが一生懸命伝えよう、分かってほしいという態度を示せば、彼らはそれに応えようとしてくれました。

実習を終え、カレッジに来る頃になっても、まだ英語は思うように使えません。使えないどころか、聞き取ることも難しかったです。それでも、いくつかのクラスを取り、テストもみんなと受けました。毎日本物の英語を耳にすることで、理解することは別としても英語を聞くことには慣れました。先生や友達、素敵な人に囲まれて私はここまでやってこれたと信じています。みんなの助けがあったからこそ、辛いときも乗り越えられたし、楽しいことも経験できた。人の優しさを痛いほど感じました。

毎日不安もあったけど、本当にいろいろな人に助けられてここまでやってこれました。楽しいことも辛いことも、たくさん経験しました。残り2ヶ月。残されたわずかな時間を、楽しみたいと思います。

アルバータ酪農科学技術交流協会 交流実績一覧 2006/3/7現在

年 度	教育者・研究者		学 生		酪農青年		計			備 考		
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	合計			
1	1974	昭和49	1				8		9	0	9	
2	1975	昭和50	1				9	1	10	1	11	
3	1976	昭和51	1				9	1	10	1	11	
4	1977	昭和52	1		1		10	6	12	6	18	学生派遣はアルバータ大大学院
5	1978	昭和53	1				10	2	11	2	13	
6	1979	昭和54	1	1	1		8	4	10	5	15	学生派遣はアルバータ大大学院
7	1980	昭和55	1	1			9	3	10	4	14	
8	1981	昭和56	1	1			10	4	11	5	16	
9	1982	昭和57	1		1		10	5	12	5	17	学生派遣はアルバータ大大学院
10	1983	昭和58	1	2			4	4	5	6	11	
11	1984	昭和59		1			5	2	5	3	8	
12	1985	昭和60		1			7	1	7	2	9	
13	1986	昭和61					7	1	7	1	8	
14	1987	昭和62					8	2	8	2	10	
15	1988	昭和63					9	1	9	1	10	
16	1989	平成元					6		6	0	6	
17	1990	平成2			1		10		11	0	11	学生派遣はオールズカレッジ
18	1991	平成3			4				4	0	4	オールズカレッジ
19	1992	平成4		1	1		1		2	1	3	学生派遣はオールズカレッジ
20	1993	平成5			7		2		9	0	9	学生派遣はオールズカレッジ
21	1994	平成6			2				2	0	2	オールズカレッジ
22	1995	平成7			4				4	0	4	オールズカレッジ
23	1996	平成8			7		3		10	0	10	学生派遣はオールズカレッジ
24	1997	平成9			10		1		11	0	11	学生派遣はオールズカレッジ6名、アルバータ大4名
25	1998	平成10			6				6	0	6	オールズカレッジ
26	1999	平成11			2				2	0	2	オールズカレッジ
27	2000	平成12			4				4	0	4	オールズカレッジ
28	2001	平成13			3				3	0	3	オールズカレッジ
29	2002	平成14			1				1	0	1	オールズカレッジ
30	2003	平成15			2				2	0	2	オールズカレッジ
31	2004	平成16			1				1	0	1	オールズカレッジ
32	2005	平成17			1				1	0	1	オールズカレッジ
33	2006	平成18			4				4	0	4	オールズカレッジ(ファームステイコース3名、英語コース1名)
計			10	8	63	0	146	37	219	45	264	
合 計			18		63		183		264			

※ 酪農青年派遣はワーキングビザで渡航、1992年からはワーキングホリデイビザで渡航

会費・寄付金

誠にありがとうございました。感謝をもってご報告申し上げます
(順不同・敬称略)

この他、北海道農政部より補助金、酪農学園後援会より助成金を受けていますことを、ここに併せてご報告申し上げます。

2005(平成17)年度 会費・寄付金 合計 2,399,000円
平成18年3月8日現在

- 相澤 親 青野 芳樹 浅井 道郎 五十嵐広司 池本麻由子
 - 井田 留吉 伊藤 智 伊東 孝哲 井上 保 梅岡 一博
 - 遠藤 一昭 大坂 博文 大関 和彦 加藤 源祐 加藤 寛治
 - 金川 幹夫 川又 卓磨 清實 隆之 小松原昇一 坂井 良成
 - 棚木真喜夫 宿田 成宏 柴田 直紀 庄子 隆洋 杉本 和彦
 - 杉山 久 高橋 智一 玉置 和則 長井 信之 中田 和孝
 - 永谷 芳晴 中村 智子 松浦 健治 三浦 有吉 宮川 俊幸
 - 美誉志征彦 村上 宗義 矢田 一則 涌田 憲一
- (以上39件)

- (有)金川牧場 (社)北海道ホルスタイン農業協同組合 (社)北海道酪農協会 (有)町村農場 雪印種苗(株) (学)酪農学園 (株)酪農総合研究所
- (以上7件)

アルバータだより No.95

発行所 北海道アルバータ酪農科学技術交流協会
〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582
酪農学園大学エクステンションセンター内
☎ (011) 386-1292 FAX (011) 387-2805
<http://www.rakuno.ac.jp/dep26/>
E-mail: exc-alt@rakuno.ac.jp

発行人 平尾 和義
編集責任者 堂地 修
印刷 社会福祉法人 北海道リハビリ